新世紀のキャンパス
Campus of New Century

国立音楽大学 新1号館

屋上庭園のベンチはピアノの黒鍵がモチーフ。練習の合間に, 各階から庭園に出て憩うことができる。

中庭跡地に建てられたこともあり, 四季の移り変わりを肌で感じられるようにと植樹されたシンボルツリー。

幅100メートルにも及ぶ壮大なピアノをイメージさせる外観。北面の階段と屋上庭園が鍵盤を模したユニークなデザインだ。

音の拡散性に配慮したオーケストラスタジオ(左)と,振り付けや“オケ合わせ”など,本番さながらの舞台をイメージしたオペラスタジオ(右)。

国立音楽大学は2011年9月,新1号館を竣工した。地下1Fから地上4Fの建物内に,108室のレッスン室,12室のアンサンブル室(大・小),オーケストラ・合唱・オペラの3つのスタジオを備えた大施設は,10年前から取り組まれてきた教育改革を具現化する校舎でもある。

同大学は,音楽学部の1学部に「演奏学科」「音楽文化デザイン学科」「音楽教育学科」を擁する。特に演奏学科の学生にとって授業のメインとも言えるのが,教員から実技指導を受けるレッスンだ。理想のレッスン室を目指し10年前に「音楽小空間形成プロジェクト」を立ち上げ,新1号館建設中も,地下に3つのモデルルームを作り,第一線で活躍する教員の実演奏で残響時間を測定,最適な音響環境を備えたレッスン室を完成させた。

一方2004年には,建学以来,初の大規模な学科再編にも踏み切っている。教育理念「良識ある音楽家,教育家の養成」にあるように,音楽教育界への人材輩出に強みを持ちながら,ピアノ教育,音楽デザイン学科(コンピュータ音楽)など,社会のニーズに応えた新領域を開拓してきた。これらの領域は残しつつ,7つあった学科を3学科に集約。カリキュラムも抜本改定した。少子化に伴う学生数の減少や学生の多様化を予測していたためだ。

「1990年代,他大学が受験生獲得に向け入口の改革を行うなか,本学は学生にどう付加価値をつけて4年後に送り出すかという出口から議論を行ってきた」と庄野進学長は語る。新カリキュラムでは,1・2年次の基礎課程でハーモニー(和声学),ソルフェージュ(読譜訓練),“音大生だったら聞いておくべき100曲”,独・仏・伊語のディクション(発音)教育などで音大生としての底上げを行う。3・4年次の専門課程では,進路に応じた34のコースから,学科を問わず目指すコースを履修する。社会で活躍する卒業生のインタビュー記事を集めた『くにたちキャリアブック』もこうした思いで作成されている。新カリキュラム導入に伴い,近年最も重点を置いているのがアンサンブル教育だ。個性の違う演奏者と一緒に一つの音楽をつくりあげる訓練が重要だと考えたからだ。個人レッスン,アンサンブルの総仕上げの場としてスタジオも完備した。

最近ではディクションやアンサンブル教育が,オペラやオーケストラの水準を上げているという。また基礎ゼミの教員すべてを専任教員による学科横断としたことで,教員間の連携が強まった。なかでも,ソルフェージュの担当教員により共通教材が編集され,長年課題だったグレードの統一が実現した。改革の効果は確実に教育改善に表れはじめた。

(取材・文/本誌 能地泰代)

ラウンジに足を踏み入れると,まるで音楽ホールにいるかのようだ。本番に近い環境で教育を受けてほしいとの願いがある。

附属図書館所蔵のモーツァルトをはじめ,著名な音楽家の貴重楽譜のコレクションを生かし,楽譜への書き込みまでリアルに再現したサインパネルが合計30枚ある。

部屋の大きさにより室内形状や内装材が異なる大(L)小(M)のアンサンブル室。Lは吸音カーテン,Mは可変吸音板で音響調整を行う。

高い遮音性と着脱可能な可変吸音板を備えたレッスン室(右)。吸音板を着脱することで,楽器の種類や個人のレベルに合わせて残響を調整する(下)。

この記事は参考になりましたか?ご意見をお聞かせください

※ご使用の環境によってはセキュリティ警告が表示される場合がございます

ご意見・ご感想フォームを開く